

羅南中学校について：在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉， 継雄

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座：教授：比較教育文化論

<https://doi.org/10.15017/25344>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 14, pp.1-19, 2012-03-26. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン：

権利関係：

羅南中学校について

— 在朝鮮「内地人」学校の事例研究 —

稲葉 継雄

はじめに

羅南は、もともと咸鏡北道鏡城郡梧村面羅南洞と称する一寒村に過ぎなかったが、日露戦争終結(1905年9月)と同時に北辺の護りの中心として駐劄日本軍の兵営地に選定され、以後「軍都」として発展した。早くも1907年3月には、当地日本人会の設立になる羅南小学校が呱呱の声を挙げている。

1909年5月出版の小冊子『清津港』によれば、すでにこの時、甲歩兵営、乙歩兵営、騎兵営、砲兵営と、その後配置すべき各連隊の位置が決められており、日本人の新居住地域には葛城通、初瀬通、飛鳥通、笠置通、春日町、生駒町、若葉町などの名が冠されていた。⁽¹⁾すなわち、韓国併合(1910年8月)の1年以上も前に、新都市羅南を奈良に見立てた都市計画があったのである。

1917年、羅南洞は羅南面(日本人主導の「指定面」となり、1919年4月には龍山から第19師団司令部が移転した。更には1920年11月、鏡城から咸鏡北道庁が移され、羅南は道政の中核としての機能も果たすようになった。

羅南中学校は、このような羅南に1924年5月、開設された。それは、1909年5月の京城、1913年4月の釜山、1916年4月の平壤、1918年4月の龍山・大田、1921年4月の大邱・元山、1923年5月の群山・光州に次ぐ10番目の在朝鮮「内地人」中学校の開校であった。

本稿は、羅南中学校がその後咸鏡北道における最高中等学校として成長した過程と、「軍都」羅南に在ったが故の学校文化の特色を描くことを主たる目的とする。

一. 学校沿革

咸鏡北道に中学校がなく、羅南在住の多くの親が子弟を咸鏡南道元山の元山中学校に遊学させていたが、1923年、新しい状況が生じた。「軍人の子供の中には、設立までの一年を高等小学校に入学して、それから新設の中学校ができるまで改めて入学した者もある。わざと一年遅れてまで自宅からの中学就学を望んだ」⁽²⁾ というのである。この証言によって、1923年には、その1年後の羅南中学校新設が確実視されていたことが窺われる。

羅南中学校の新設を含む「朝鮮総督府諸学校官制」の改正が1924年3月29日閣議決定され、これ

を受けて、1学年2学級（定員100名）、5年制の男子中等学校として羅南中学校が正式認可されたのが4月18日、元山中学校長西脇豊造が羅南中学校長事務取扱兼務を命ぜられたのが、翌19日のことであった。

西脇の羅南中学校長事務取扱兼務は、羅南中学校関係者の間に、羅南中学校は「元山中学校の羅南分校として、全鮮で十番目、咸鏡北道唯一の中学校として呱呱の声を挙げました」⁽³⁾とか、「羅南中学校と元山中学校は兄弟校だった」⁽⁴⁾という認識を生んだ。しかし、西脇豊造は、5月26日に今井嘉一が羅南中学校長に任命されるまでの1ヵ月余、校長事務取扱だったに過ぎず、元山中学校と羅南中学校が本校・分校や兄弟校の関係にあった実態はない。蛇足ながら、1924年5月当時、西脇豊造と今井嘉一の官等は、同じく4等6級であった。これからしても、両校は対等な独立校であったと見ることができる。

5月5日、羅南中学校は、第19師団野砲兵第25連隊の木造2階建の旧兵舎を仮校舎として開校された。これに先立つ入学試験は、「試験場は確か羅南高等女学校の講堂であった。志望者が定員すれすれであった」⁽⁵⁾という。

1925年4月、それまで朝鮮総督府の直轄（官立）であった中学校・高等普通学校が各道に移管されることになり、羅南中学校は、咸鏡北道立の「羅南公立中学校」と改称された。

同じく1925年には、羅南中学校陸上競技大会が開始されたようである。というのは、1928年10月3日付の『京城日報』に次のような記事があり、これから逆算すると第1回は1925年秋ということになる。

羅南中学校第四回秋季陸上大会は三十日午前八時三十分から駅裏グラウンドにおいて花々しく開催された、当日は秋空晴れて絶好の競技日和で開会前後から押寄せる観衆無慮数千で人気彌が上にも挙り十重二十重の人垣であつた

羅南中学校秋季陸上競技大会は、一中学校の校内行事でありながら棒高跳や円盤投も含む本格的な競技会であり、羅南の町の呼び物となった。

1926年、日本内地に1年遅れて朝鮮の日本人中等学校でも配属将校による軍事教練が開始された。羅南中学校における軍事教練の特色は、他校の配属将校が少尉クラスひとりだけだったのに対して、何時からかは明確でないが羅南中の配属将校は複数、しかも中佐・少佐・大尉クラスが普通だったことである。

1926年には上級生の修学旅行も始まった。第2回生のひとは、京城への修学旅行を次のように回想している。

大正の終わりの北朝鮮では、まだ鉄道の咸鏡線も全通していなかった時代である。その時代に羅南中学校では、京城までの乗物で一日半行程の大修学旅行を行ったのである。勿論、清津からは一晩の船である。上陸した元山からは京城までは半日の汽車である。

羅南中学校について

私の中学二年の夏であるから大正15年である。3年（当時の最上級生）と2年と合わせて120余名余りの子供達をつれての旅であったから、引率の先生方のご苦勞も大変であったろうと思う。……（中略）……

学校の意向としてはこの旅行で、田舎者の中学生に京城という大都会を体験させて、見聞を広めさせたいという所にあったと思われるが、残念ながら私にはどこを見たかという記憶は殆ど残っていない。覚えているのは朝鮮総督府の、総大理石造りの立派な建物だけである。⁽⁶⁾

修学旅行は、翌1927年、国境を越えて間島にも足を伸ばすようになった。間島修学旅行は、1931年に満州事変が勃発しても暫く継続されたが、後述するように1936年、内地旅行にとって代わられた。

1928年7月、羅南中学校の4・5年生が歩兵第76連隊に体験入営した。その模様は次のとおりである。他の中等学校が最寄の部隊への体験入営を始めるのは満州事変後のことであるが、羅南中学校は、3年先立ってこれに先鞭をつけたのである。

羅南中学校四、五年生徒九十三名は軍隊生活を体験し併せて軍人精神涵養の為廿二日より三日間同聯隊に起居する事になつて二十二日教官谷家大尉引率のもとに歩兵七十六聯隊に入営した聯隊長代理として小松中佐より一場の訓示を受け直に二大隊の各中隊に分属され一般兵率と起居することになった当日は午前中教練をうけ、午後は射撃、夜は軍事に関する活動写真を見物し、二十三日は前日同様で二十四日は午前中学科、二十五日午前四時半より三本松高地において現役兵員合同戦闘演習を行ひ引返し営庭にて分列式をなし同日午前十一時退営した⁽⁷⁾

1924年5月の開校以来借用してきた仮校舎は、「恐らく兵隊の寢室ではなかったろうか」⁽⁸⁾といわれており、「建物の構造校舎に適せず教養上支障少」⁽⁹⁾ なくなかった。したがって、本格的な校舎の新築が早くから要望されていたが、そのための予算（設計費）が計上されたのは1928年度に入ってからであった。同年11月、「いよいよ明年度において新築される事に決定し目下道当局者の手によつて設計されつつあるが……（中略）……本校舎は三階建の堂々たる建築で敷地は第一候補地であつた処の駅裏川向ふの広場である」⁽¹⁰⁾ と報じられている。

1929年2月、校舎新築に着手、9月末竣工した。新校舎は、当時としては珍しかった鉄筋コンクリート3階建てで、校歌にも「堅剛無比の我が学舎」と歌われることになった。なお、新校舎裏の小高い山が標高113mであるのに因んで百寿山（ひゃくじゅさん）と名付けられ、羅南中学校のシンボルとなった。

新校舎への移転直後に作られた校歌は、第3代（専任としては第2代）校長宇留島喜六の作詞、陸軍戸山学校軍楽隊の作曲で、歌詞は次のとおりである。

一、玲瓏として雪の峰 渺茫として日本海

天は紺碧鮮やかに 地には千草の花匂ふ
我等を懐く大自然 深き啓示のなからんや

二. 堅剛無比の我が学舎 集う健児の鉄石心
闇の醜雲おほうとも 燃ゆる意気もて押し払い
唯一筋の正道を 踏みて進まん勇ましく

三. 朝日に匂う至誠山 霊泉は尽きせぬ羅北川
赤き心の一徹を 清き流れにみそぎして
捧げ奉らむ諸共に 大君の為国のため

当時の在校生はこの校歌を、「作詞作曲共に時局の進展を予兆して、ミリタリズムとナショナリズムの昂揚を内包した、所謂志気鼓舞の極く一般的なものであった」⁽¹¹⁾と評している。

ところで、大正末期から昭和初期にかけて朝鮮で流行した歌に「国境警備の歌」というのがあった。「ここは朝鮮北端の 二百里余りの鴨緑江 渡れば広漠南満州 川を渡りて襲いくる 不逞の輩の不意打ちに 妻も銃とり応戦す」⁽¹²⁾などの歌詞からして中学生にふさわしいとは思われないが、「どうした訳かこの歌が、羅南中学生に学校で教えられた」⁽¹³⁾という。まだ校歌がなかった頃に羅南中学校で歌われた歌のひとつとして紹介しておく。

校歌の作詞とともに宇留島校長の行跡として記憶さるべきことは、1929年7月、羅南中学校が甲子園の全国中等学校優勝野球大会の朝鮮予選に、校長の理解を得て漸く参加するようになったことである。当時の新聞の「朝鮮予選前記」羅南中学の項は、次のような書き出しである。

毎年大会に参加の希望は持っていたが、前校長が運動に理解なく、参加出来なかったところ、今度釜山高女から来た宇留島校長は二つ返事で参加を承知したので、多年の希望を達した。⁽¹⁴⁾

1931年9月、満州事変が勃発、羅南中学校も直ちに対応を迫られた。羅南駐屯の各部隊による「混成第38旅団が編成され、私共は毎日の様に万歳！万歳！の歓呼の嵐の中に羅南駅頭で出征兵士を見送った」⁽¹⁵⁾という。そして翌1932年、満州国が成立するや、羅南中学校生は、出征兵士を見送るにとどまらず在満諸学校に進学するようにもなった。「羅中の先輩達も満洲の学校に進学している人達もかなりいた」ことから「満洲に渡ろうと決心した」⁽¹⁶⁾者も出ている。

1932～35年度の泉政次郎校長時代は、学校の環境整備に力が注がれた時期である。朝鮮半島をかたどった池（朝鮮池）も当時の産物である。ただ、「毎日のように放課後作業があり、中には作業大学などと不平を言う者があった」⁽¹⁷⁾という。

1937年4月、この時の新入生（第14回生）から、肩掛けカバンがランドセル式の背囊に変わった。この背囊は生徒たちに不評だったようで、彼らの回想記には、「憧れの肩掛けカバンで羅中入学、背

囊ゲートルで失望」⁽¹⁸⁾といった趣旨の述懐が散見される。背囊はカーキ色で、カーキ色に象徴される戦時色が、この年7月の日中戦争勃発を機にますます強くなっていった。

羅南中学校の内地修学旅行は、1936年春（第10回生の4年生時）からであった。「行先のことで満州、中国方面は将来行けるが、日本人で内地を知らなくては行けないと、かくして内地に決定」⁽¹⁹⁾したという。スケジュールは、東京での天長節（4月29日）祝賀行事を中心に組まれた。日中戦争から太平洋戦争にかけて、長期の修学旅行は当局の圧力によって次第に難しくなり、1941（昭和16）年の内地修学旅行は、「聖地参拝」を名目として漸く実現した。ある第15回生は次のように述べている。

修学旅行……中学へ入ると四年生で内地旅行が出来る事は一年からの憧れであった。我々は昭和十六年、大東亜戦争が十二月だったので何とか行く事が出来たが、観光地は無く櫃原神宮、伊勢神宮、靖国神社等どこでも草取り、清掃とかの勤勞奉仕の旅だった。

然し、長い船の中、旅館の風呂、食事、部屋での布団蒸し、枕投げ等結構楽しい旅だった。翌年からは中止となったようで、最後の修学旅行が出来たのも幸せと云うべきか。⁽²⁰⁾

この引用の「翌年からは中止となった」のは内地修学旅行であって、修学旅行自体ではなかった。1942年には、内地修学旅行に代わるものとして第16回生の金剛山登山（1泊2日）が行なわれ、これが結果的に羅南中学校最後の修学旅行となった。

1945年3月、勤労働員のため3年次以上の授業をまともに受けることがなかった第17回生と第18回生が同時に卒業した（第18回生は修業年限4年で繰り上げ卒業）。ただし、彼らの人数は不明で、したがって羅南中学校の卒業生総数は、第16回生までの977名プラス・アルファということになる。

羅南中学校の事実上の終焉が何時であるかについては諸説がありうるが、ここでは1945年8月11日としておく。8月11日は、ソ連の対日参戦を受けて、当時主として清津地区の工場などに動員されていた羅南中学校3・4年生がその場で解散した日である。この日を最後に、各クラスの全員が集うことはなかった。

しかし、寄宿舎生の多くは、勤労働員先からいったん寄宿舎に戻った。そして13日、配属将校の指揮の下、銃を執るつもりで「学徒隊」を編成した。羅南在住の生徒にも非常呼集が掛けられたが、応じた者は少なく、学徒隊（30余名）は、ほとんど寄宿舎生だけで組織された。鈴木義夫校長は、次のように訓示したという。

諸子よ、われわれは遂に非常事態を迎えた。先刻、軍司令部より命令が下り、諸子も防衛作戦に参加することになった。憎きソ連軍は、本日午後、清津地区に上陸を開始し、現地守備隊および警官隊がこれと応戦中である。よって諸子はこれより軍の指揮下に入る。……（中略）……

諸子よ、われわれは直ちに行動を開始する。この学舎とも、今夜限りの別れになるやも知れない。だがしかし、私は大日本帝国の必勝を信じておる。諸子も、あくまで必勝の信念を堅持し、悠久の

大義に生きられんことを、切に、切に希望する。⁽²¹⁾

羅南中学校の学徒隊は、軍の方針変更により、結局、軍事作戦に参加しなくてよいことになった。しかし、彼らが実際にソ連軍と戦う気になっていたことは事実である。学徒隊の一員は、「北辺警護の第十九師団お膝元の中等学校として、吾が羅南公立中学校が、配属将校の下に結成した学徒隊は、大日本帝国の最後に存在した学徒隊であったのではないかと、心秘かに自負して居ります」⁽²²⁾と、戦後55年を経た時点でもなお「軍国少年」であり続けている。

8月14日未明、学徒隊は、「全員で校舎に敬礼し」⁽²³⁾、中川房一教諭の引率で朱乙へ向けて逃避行を開始した。これが、実体としての羅南中学校の最期であったと見てよい。

二. 教員の去就

1. 校長

西脇豊造は、前述したように1924年4月19日から5月25日まで羅南中学校の校長事務取扱であったに過ぎない。しかし、『羅南公立中学校同窓会会誌 百寿』が西脇を初代校長としている⁽²⁴⁾ので、ここでは、その認識を尊重することにする。

西脇は、1906年に東京高等師範学校を卒業し、1912年に朝鮮に渡った。京城高等女学校教諭(1912～14年度)、京城中学校教諭(1915～21年度)を経て1921年5月、元山中学校の初代校長となり、その在任中に羅南中学校長事務取扱を兼ねたのである。羅南から最も近い所にある日本人中学校の校長であったことから新設羅南中学校の校長事務取扱を命ぜられたものと思われるが、羅南中開校時の教頭が後輩(東京高等師範学校1909年卒)の竹谷直弥だったところに西脇の意図を窺うことができる。

第2代(正式の校長としては初代)校長今井嘉一の、朝鮮渡航までの略歴は次のとおりである。

熊本県鹿本郡来民町の人で明治十三年生れである。旧姓古荘、東京帝国大学英文科出身にて長崎県立対馬中学教諭を振出しに同県佐世保中学教諭を経て壱岐中学校長諫早中学校長を歴任し、大正十三年朝鮮羅南中学校開設と共に其の初代校長として聘されて渡鮮したのが半島教育に手を染むる第一歩であつた。⁽²⁵⁾

羅南中学校長としての今井の最初の仕事は教員集めであった。第2回生の回想によれば、「朝鮮北辺の地にまで先生として出掛けてくる様な奇人な人は、殆どなかった様である。時の校長今井嘉一先生は、東京まで出掛けて先生募集に大苦心をなされた様である。そして学校を卒業したばかりの若い先生をやっと見つけてきた」⁽²⁶⁾という。「学校を卒業したばかりの若い先生」とは、東洋大学専門部卒の矢島貞二と東京外国語学校卒の河野要である。

また、校舎新築・移転までの道筋をつけたのも今井であった。『朝鮮功労者銘鑑』は、羅南におけ

る今井の功績を次のように総括している。

今井校長渡鮮の頃は北鮮に汽車なく且つ満目殺風景であつて、不便と不自由の極にあつたが従て羅南中学校敷地の買収、校舎の新築等は多大の苦心を重ね内容を充実し校風を樹立して北鮮に羅南中学ありと云はるゝまでに築き上げた今井氏の努力と功績は大なるものがある。⁽²⁷⁾

新校舎の建築工事が進んでいた1929年5月、今井嘉一は新義州高等普通学校長として転出することになった。これは官立師範学校の新設に伴う異動の一環で、次のような典型的な玉突き人事の結果であった。1929年5月、官立大邱師範学校が新設され、その校長に京城第二高等普通学校長であった平山正が任命された。後任の京城第二高等普通学校長には新義州高等普通学校長であった高木善人が就き、高木の後釜として今井が新義州に異動したのである。

今井はその後、新義州高等普通学校長を3年務め（1929～31年度）、平壤高等普通学校～平壤第二中学校（1938年に校名変更）の校長も歴任した（1932～41年度）。

今井の後任の羅南中学校長には、釜山高等女学校長であった宇留島喜六が就任した（1929年5月3日付）。宇留島喜六は、1908年に広島高等師範学校を卒業、数年の内地勤務を経て朝鮮に渡り、京城高等女学校教諭（1913～17年度）、水原農林専門学校助教授（1918～20年度）、京城（第一）高等普通学校教諭（1920～23年度）、釜山高等女学校長（1923～29年度）の後、羅南中学校長となった。羅南在任は1932年3月までの3年弱であったが、特筆すべきは、羅南中学校歴代校長の多くを広島高師卒（尚志会員）が占めることになるその草分けが宇留島喜六だったことである。

ちなみに、宇留島が羅南中学校長となった1929年5月当時、朝鮮総督府学務局には視学官として、宇留島の広島高等師範学校時代の恩師赤木萬二郎、先輩（1907年卒）柏木三郎、後輩（1913年卒）高橋濱吉がいた。

宇留島は、1932年3月、新義州中学校長に異動した。学校こそ違え、羅南→新義州は、前任の今井嘉一と同じコースであった。羅南～新義州時代、宇留島喜六は、「国境にあつて満洲国の建設を眼前に見ながら質実剛健の校風を樹て孜々として倦まず青年教育に熱情を捧げてゐた」⁽²⁸⁾と評されている。

宇留島は、新義州中学校長（1932～35年度）の後、光州中学校～光州東中学校（1938年に校名変更）の校長を務めた（1935～43年度）。釜山→羅南→新義州→光州と、まさに半島縦断の異動であった。

宇留島の後任（第4代）校長は、広島高等師範学校で宇留島の5年後輩（1913年卒）に当たる泉政次郎であった。泉は、仁川高等女学校教諭（1914～21年度）、平壤中学校教諭（1921～31年度）を経て羅南中学校長となった。すなわち、羅南中で初めて校長に昇任したのである。このあたりに先輩宇留島の「引き」を想像するのは、いわゆるげすの勘繰りであろうか。

泉政次郎は、羅南中学校長（1932～35年度）に続いて清州高等普通学校～清州中学校（1938年に校名変更）の校長を務めたが（1936～38年度）、その後ほどなくして亡くなったようである。羅南中

学校第12回（1939年度）卒業記念アルバムには「故泉前校長」の写真がある。

第5代校長市村秀志の学歴は、広島高等師範学校数物化学部1913年卒、同校德育専攻科1925年卒である。つまり、広島高師数物化学部において泉政次郎と市村秀志は同級生だったのである。教師としての市村は、「ドイツ留学の経験のある、ペスタロッチを研究された進歩的な教育者」⁽²⁹⁾として名を成し、それ故に羅南中学校長に抜擢されたのであろうが、羅南中学校の校長ポストがかつての広島高師同級生の間で引き継がれたことは、単なる偶然とは考え難い。

朝鮮での市村は、京城師範学校教諭（1928～35年度）から羅南中学校長となった。羅南中で初めて校長となった点も、泉政次郎と共通である。

羅南中学校長を僅か1年余（1937年4月15日付）で辞した市村秀志は、その後全羅南道視学官（1937～38年度）、大邱師範学校長（1939～40年度）、総督府視学官（1941～42年度）、京城工業学校長（1943年度、以後不明）を歴任した。

第6代校長高橋虎彦は、1911年東京高等師範学校卒であった。すなわち、羅南中学校歴代校長における尚志閣は、ここでいったん跡切れたのである。

羅南中学校長となる前に高橋は、京城専修学校助教授（1916～20年度）、咸興高等普通学校教諭（1921～25年度）、大邱高等普通学校教諭（1925～31年度）、大邱高等女学校長（1932～36年度）を経験していた。この21年のうち1922年以降の10年は教頭、5年は校長であった。この管理職経験の豊かさが、尚志会系の泉政次郎や市村秀志と違うところである。

1937年4月16日付で羅南中学校長の辞令を受けた高橋虎彦は、中等学校長たる高等官が乗るべき2等車ではなく3等車から羅南駅に下り立った。そこで早速「3虎（サントラ）」の渾名を奉られ、生徒間では、本名よりも「サントラ」が膾炙することになった。高橋の羅南在任は3年弱に過ぎなかったが、生徒たちには強烈な印象を残したようである。次にふたり（第11回生と第15回生）の回顧談を紹介しておこう。

市村校長の後任として、或る女学校の校長から来られたので、優しい校長かと思っていたら、剣道五段の猛者、毎朝の朝礼後の早足行進の練習には参った。⁽³⁰⁾

軍事教練の大好きな「サントラ」校長は、配属将校の野田三綱中尉に気合いを入れて、陸軍の学校かと思う程教練に明け暮れ、出征兵士の見送りのため授業をやめてまで見送りに行った。⁽³¹⁾

羅南中学校長の後、高橋虎彦は新義州高等女学校長となった（1940～42年度）。今井嘉一・宇留島喜六と同じく羅南→新義州のコースを辿ったのである。

第7代校長西東瑞穂は、もともと熊本県師範学校卒の初等教員であったが、検定を経て中等教員となり、朝鮮には1923年、平壤中学校教諭として赴任した。平壤中在任は14年に及び（1923～36年度）、35～36年度は教頭であった。1937年4月、海州女子高等普通学校で初めて校長となり、同校（1938年、海州幸町高等女学校と校名変更）に3年在任、1940年3月30日付で羅南中学校長を拝命し

羅南中学校について

た。羅南在任は1944年3月30日までの丸4年であったが、この間3人の息子はいずれも羅南中学校で学び、長男は1943年3月、父親から卒業証書を授与された。

当時すでに教員が不足していたためか、生徒は西東校長から「数学と修身を教わった」⁽³²⁾という。校長が、修身のみならず数学まで教えたところが特異である。

西東瑞穂は、羅南から大邱に異動し（大邱高等女学校長）、そこで敗戦を迎えた。⁽³³⁾

西東が転出した後の校長には、1944年4月7日付で高清水勇助が着任した。高清水は、1926年東京高等師範学校卒で、1937年4月、官立咸興師範学校の創立とともに同校教諭兼附属普通学校主事となり、1942～43年度は平安南道視学官をしていた人である。

羅南中学校最後の校長は鈴木義夫であった。「朝鮮総督府官報」によれば「補羅南公立中学校長 朝鮮公立中等学校長兼朝鮮公立中等学校教諭 鈴木義夫」の辞令は1944年12月9日付であるから、高清水勇助の羅南中学校長在任は僅か8ヵ月だったことになる。

鈴木義夫は、1925年広島高等師範学校文科第一部の、1928年同校徳育専攻科の卒業である。すなわち羅南中学校の校長ポストは、市原秀志が転出して以来7年8ヵ月ぶりに尚志会員の手に戻ったのである。鈴木は、仁川高等女学校教頭（1938～39年度）を経て校長となり、黄海道の安岳中学校で4年余の校長経験があった。この点、同じ尚志会系羅南中学校長でも泉政次郎・市村秀志とは異なる。

2. 教諭

上に見たように、羅南中学校歴代校長人事における最大の特色は、広島高師（尚志会）色が顕著だったことである。1929年に宇留島喜六が羅南中学校長となるや泉政次郎～市村秀志と尚志会員校長が続き、最後の校長も尚志会員の鈴木義夫だったのである。この傾向は教諭にも及び、管見の限りでも広島高師卒の羅南中学校教諭は4名を数えた。その氏名、広島高等師範学校卒業年、羅南中学校在任時期は、伊東良夫（1925年 1931～38年度）、加藤義夫（1930年 1930～35年度）、稲元正（1930年 1934～37年度）、藤本三郎（1931年 1931～36年度）である。彼らの羅南在任は、いずれも宇留島・泉・市村校長の在任期間と重なっており、校長の教員人事権が作用したことを窺わせる。このいわば尚志閥は、ライバルの東京高師（茗溪会）系が、開校時の教頭竹谷直弥と第6代校長高橋虎彦の他は1ヵ月余の校長事務取扱西脇豊造と在任僅か8ヵ月の第8代校長高清水勇助だけだったのと対照的である。

伊東良夫は、平安北道師範学校教諭（1929年度）、新義州中学校教諭（1930年度）を経て羅南中学校教諭となり、1938年度は教頭であった。1939年、鏡城中学校教頭として転出した。鈴木義夫との朝鮮での縁は明らかでないが、伊東良夫と鈴木義夫は、広島高等師範学校文科第一部の同級生であった。

加藤義夫は、1930年、広島高等師範学校を卒業すると同時に、宇留島喜六が校長の羅南中学校に就任した。結婚の時期は不明であるが、加藤は宇留島の女婿であった。そして羅南中学校教諭の後、岳父の跡を追うように光州へ向かい、光州高等女学校～光州大和高等女学校（1938年に校名変更）

の教諭を務めた（1936～43年度、以後不明）。

藤本三郎は、1937年、羅南から国境を越えて満州の撫順中学校に赴任した。

羅南は朝鮮半島の北端に近い寒冷地であるが、羅南中学校には、その厳しい自然環境に耐えて長期勤務した教員が結構多い。便宜上8年以上勤続を長期勤続者としてその氏名、羅南中学校在任時期を示すと次のとおりである。

吉川嘉門（1927～37年度）、宇須井昇（1927～38年度）、中川房一（1927～45年度）、萩尾三八（1928～36年度）、中原剛三（1928～37年度）、西元藤市（1928～45年度）、河本進（1929～38年度）、宮沢一馬（1929～38年度）、島田岩太郎（1930～39年度、以後不明）

中川房一は図画・書道の担当で、羅南中学校のみならず羅南高等女学校の教諭（1933～38年度）、東羅南高等女学校教諭（1939年度）も兼ねた。終戦時4年生だった羅南中第19回生によれば、「あの時代にあってビンタをとっている姿を見たことのない唯一の先生だった」⁽³⁴⁾という。

萩尾三八（1929年、高山から萩尾に改姓）は、1937年、羅南中学校教員17名中序列12位の平教諭から会寧高等女学校の教頭となった。咸鏡北道中等教育界における羅南中学校の地位を窺わせる人事であった。

中原剛三は、羅南中学校在任10年中7年（1931～37年度）は教頭で、その間、宇留島・泉・市村・高橋と4名の校長を補佐した。

西元藤市は、「羅中始めより終戦までおられた」⁽³⁵⁾教員として記憶されている。中川房一に次ぐ長期勤続者である。

宮沢一馬と島田岩太郎は、ともに夫人が羅南高等女学校の出身であった。羅南在住中に結婚したものと思われる。

長期勤続者のひとりとして挙げた宇須井昇は、羅南中学校教諭から1939年6月、三陟職業学校長に昇任した。同じく羅南中学校教諭から他校の校長となったのが山口悦三と山本菊太郎である。山口悦三は、教頭を2年余（1939～41年度）務めた後、清津女子実業学校長として転出したが、山本菊太郎は、羅南中学校の末席教諭（1928～29年度）から初等学校訓導・校長となり、いずれも咸鏡北道所在の朝鮮人初等学校の校長を歴任した。その勤務校および時期は次のとおりである。

徳山普通学校（1930～32年度）、茂山普通学校（1933～35年度）、慶源普通学校（1936～37年度）、慶邑小学校（1938～39年度）、南陽旭日小学校（1940年度）、南陽旭日国民学校（1941年度）、灰岩西国民学校（1942年度）

羅南中学校教諭で最終学歴が明らかでない者は多くないが、帝国大学卒であることが確実なのは三上章（東京帝大卒 在任1930年度）、柏木博文（京城帝大卒 在任1937年度）、池田隆司（台北帝大卒 在任1937～39年度、以後不明）、内川克（京都帝大卒 在任1938～40年度、以後不明）の4名である。

また、岡部繁雄（在任1927～28年度）と須崎正義（在任1932～37年度）は、羅南中学校教諭を辞して東京商科大学に進学した。須崎は、その後香川大学教授となった篤学の士であった。

三. 羅南中学校の学校文化

羅南は、19師団とともに在ったと言ってよい。「羅南の街は各連隊の兵舎と連隊に所属する将校達の官舎で街中が覆われた」⁽³⁶⁾ ほどであった。したがって、羅南中学校の学校文化も、軍国主義と不可分であった。

「御聖旨を奉体して至誠奉公、質実剛健、清廉潔白の美風を養ひ国境に於ける国民の重責に鑑み、堅忍不拔、進取敢為の精神を養ひ以て一身を^(ママ)堵して責任を重んずる徹底的真剣味を体得せしめんとする」のが羅南中学校の教育方針であり、これに基づいて、「至誠を旨とし勤労に服すべし、規律を守り礼儀を正しくすべし、質素を尚び剛健を養ふべし、責任を重んじ操守を堅くすべし、小成に安んぜず進取の気を養ふべし」という5カ条の校訓が定められた。⁽³⁷⁾

このような教育方針や校訓は、当然、教育内容にも反映された。体操・武道・教練の重視が、その最も端的な現われであった。体操は普通体操および兵式体操、武道は剣道か柔道の選択必修であり、教練は、前述したように他校より高位の、複数の配属将校によって指導された。配属将校による軍事教練が朝鮮の中等学校に導入された1926年以降、授業には「毎日体操、武道、教練のいずれかの教科が組込まれていた」⁽³⁸⁾ という。

教練の延長として連隊の軍旗祭への参加や軍民（学）連合の軍事演習があった。1928年9月の第76連隊軍旗祭の様子は次のとおりである。

歩兵七十六聯隊第八回軍旗祭は十五日盛大に挙行された……（中略）……猶羅南各学校生徒、鏡城高普生徒、数千名も参列した午前十時よりプログラムによつて各種競技は催され、午前中の呼び物の一であつた学生聯合模擬戦は想定も面白く観衆を喜ばせた⁽³⁹⁾

陸軍記念日（3月10日）の軍民連合軍事演習については、1925年入学1930年卒業の第2回生が次のように回顧している。

3月10日、昔の陸軍記念日に当たって、軍民連合の軍事演習があった。私達中学生も銃を持って参加した。想定は北方から攻撃して来る敵兵を、先ず北の丘陵の地の第一線で防御し、ここで破れて羅南の町を走り抜けて、南の山麓で陣形を建て直して戦うというのであった。

私達も羅南の町を走って逃げた記憶がある。そして南の山に登った時、気がついて見れば、私の腰の短剣（通称ゴボウ剣）の中身がない。一瞬青くなった。陛下の剣を失ったとあっては申し訳がないのである。それ程軍人精神が吹き込まれていたのである。⁽⁴⁰⁾

日中戦争期になると3泊の「管内宿泊訓練」や2日がかりの雪中行軍も行なわれた。次の引用は、1939年入学生の思い出である。

だんだんと戦争が進んで来ると男子中等学校の上級生になると、管内宿泊訓練と称して3泊位連隊営舎に送り込まれた。年間に1回か2回位は道内の軍学連合演習という名目で2日がかりの、兵隊と一緒に学生生徒達も其の近辺の山野、これは冬になると白一色の雪原となるが其の中を背囊を背負い銃を掲げて駆けずり廻された。⁽⁴¹⁾

羅南中学校の軍国主義的学校文化の象徴は、1945年夏に行なわれたグライダー訓練であろう。これは、「純粋な軍国少年になっていった」⁽⁴²⁾ 羅南中学校第19回生（当時4年在学）約20名をはじめとする羅南一帯の中等学校生を人間爆弾「桜花」の特攻要員として訓練するものであった。次は、第19回生の思い出の記「人間爆弾にならずにすんだ仲間たち」の一節である。

あれは、確か終戦の年の七月中旬、勤労働員で北朝鮮には珍しい朱乙温泉の東亜窯業所で耐火煉瓦を作っていた時のことだった。先生に呼ばれ、この書類に父兄の印鑑をもらって、指定日時に必ずグライダー訓練を受けに行くように言われた。

その頃は、先生の言うことは絶対で「いやだ」などと言おうものなら、たちまちピンタが飛んでくる。この非常時に何故グライダーかと思いつつも、指定場所を見ると科学博物館だった。……(中略) ……

帰国後、二、三年経って靖国神社に参拝した時のことである。

博物館を興味深く見て回り二階に上がると、翼の長さが二メートル程の飛行機がぶら下がっていた。なんという飛行機の模型かなと思って近付くと、「桜花・先端に五十kgの爆弾を詰め、飛行機から放された後は、搭乗者が目標に向かって操縦する特攻爆弾」と説明書が付いていた。

この時、あの滑空訓練は「桜花」の要員にするための訓練だったのかと分かった時、もしも終戦がもう半年遅れていたら、「桜花」に乗せられ、この世に存在しなかったのだと思った。⁽⁴³⁾

このほか教育内容に関して附言しておきたいことは、羅南中学校では英語の授業が、時間数こそ減らされていったものの、最後まで無くなりしなかったことである。1945年4月に内地の学校に進学した第18回生は、「内地の学校では、英語は廃止されていたようで、医学部に入ってからドイツ語に移ったのですが、基礎でいくらか助かったものです」⁽⁴⁴⁾、同じく1945年4月に羅南中に入学した第22回生は、「私の羅中は、一学期のみで終わったが、新しく勉強した英語、数学、図案と課外に励んだ滑空部の活動が鮮明に記憶に残る」⁽⁴⁵⁾と証言している。

次に羅南中学校の生徒数、生徒の出身地などについて見てみよう。

羅南中学校の入学定員は、1924年の開校から1945年の自然廃校まで一貫して100名（2クラス）であった。しかし、次頁の表に見るように1932年までは定員を満たしていない。これは、志願者が少なかったからではなく、水準以下の志願者を合格させなかった結果である。前述したように、第1回の入試は「志願者が定員すれすれであった」が、実際の合格者は75名にとどまった。1929年度入

羅南中学校について

入学及び卒業生数

(準卒は4年修了者)

年度	入学者	卒業生	準卒	年度	入学者	卒業生	準卒
1924年	75			1938年	105	(第10回生) 77	5
1925年	85			1939年	107	(第11回生) 60	4
1926年	82			1940年	110	(第12回生) 71	7
1927年	93			1941年	105	(第13回生) 73	0
1928年	91			1942年	106	(第14回生) 83	0
1929年	92	(第1回生) 47	3	1943年	110	(第15回生) 63	0
1930年	91	(第2回生) 45	1	1944年	107	(第16回生) 88	0
1931年	94	(第3回生) 46	3	1945年		(第17回生)	
1932年	94	(第4回生) 43	0			(第18回生)	
1933年	120	(第5回生) 41	0			(第19回生)	
1934年	100	(第6回生) 57	2			(第20回生)	
1935年	106	(第7回生) 58	0			(第21回生)	
1936年	106	(第8回生) 62	9			(第22回生)	
1937年	111	(第9回生) 63	9	合計	2090+ α	977+ α	43

出所)『羅南公立中学校同窓会誌 百寿』2000年 附録p.2

試の志願状況は次のとおりである。

羅南中学校本年度入学志願者は総数百二十六名であるが地方別に区分すれば△羅南四八名△清津四六名△会寧八名△雄基四名△内地よりの志願者二名△朝鮮人二名△その他道内一六名⁽⁴⁶⁾

この新聞記事から、志願者は、地元の羅南と隣の清津からが圧倒的に多いが、しかし、両地区のみならず咸鏡北道全域、さらには日本内地からも志願者があったこと、また、志願者126名と上表の1929年入学者92名から、実質的な競争率が1.4倍だったことがわかる。

このような傾向はその後も続いた。1936年4月の入学者が次のように述べている。

入試科目は国語、算術、作文であった。……(中略)……

競争率は二倍程度で、二組編成の百数名が入学を許された。当時、咸北に中学校は羅中だけだったので、咸北全域と隣接の間島省の小学校からも受験生がいた。中でも児童数が際立って多かった羅南小学校と清津小学校からの受験者が多かった。従って入学者もこの両小学校の出身者で六・七割を占めていた。⁽⁴⁷⁾

清津から羅南中学校に通う生徒は「清津生」と呼ばれた。彼らは、清津から羅南まで「片道二時間を超える汽車通学」⁽⁴⁸⁾を強いられたが、敢えて「寄宿舎生」にならなかった理由のひとつは、後述するような寄宿舎生活を敬遠したからであった。なお、1940年5月には、入学定員50名、内鮮共

学の清津中学校が開設されたが、羅南中学校の「清津生」が減ることはなかった。

1929年9月末、新校舎とほぼ同時に完成した寄宿舎は「洗心寮」と命名された。洗心寮での生活は、「私は充実した花の中学生時代の五年間を羅中の寄宿舎、洗心寮で過した」⁽⁴⁹⁾と肯定的に評価する向きもあるが、羅南中学校同窓会誌などには否定的評価が多い。次の引用は、第15回生（1938年入学）の証言である。

寄宿舎「洗心寮内務班」に入学と同時に入寮したが、よくいじめられた。我々一年生の時の恐ろしい五年生は、「留さん」「杉原さん」「内藤さん」「山田さん」等がいて、夫々室長をしていた。……（中略）……《いじめ》は先生方の黙認のようにも感じられた。私はよくいじめられたので、寮を出て下宿をした。⁽⁵⁰⁾

「洗心寮内務班」は「羅中連隊内務班洗心寮」とも呼ばれたが、要するに寄宿舎生活が、連帯責任・鉄拳制裁などを特徴とする軍隊生活のようなものであったことを示している。

「内務班」の規範を、寄宿舎生のみならず羅南中学校生全般に適用する場が、百寿山の中腹の「説教台」であった。「説教台」をめぐるエピソードは枚挙に暇がないが、次に典型的な例をひとつだけ紹介しておこう。

説教台……校舎の左手の小高い丘にあった。その名も説教台、読んで字の如く説教される場所だが、上級生より何かと言えば呼び出しがあり、全体責任とか、グループで説教と言うよりなぐられ台、正座三十分とか、放課後なので時間制限もなく、日が暮れてから友人と慰め合いながら帰ったものだ。⁽⁵¹⁾

「洗心寮内務班」は実際に存在したわけではないが、羅南中学校に「学友班」という組織は実在した。発足したのは1929年4月で、それを報じた『京城日報』記事は次のとおりである。

羅南中学校では新学年に入ると共に生徒の風紀改善校風の作興について取締るべく生徒各自に対しては生徒必携の小冊子を携帯せしめてその守るべき諸心得を会得せしめ一方家庭には『家庭の注意概略』なる冊子を配布し家庭人としての心得および学校との連絡について注意を促しなほ生徒通学区域により十個の学友班を組織し学友相互の切磋研究の一機関を設け各学友班に係教育班長、副班長各一名を挙げ班の親和をはかり風紀の振肅に努むるようで班長表示は金色の紅葉型、副班長は銀色の紅葉型を襟章につける事になつてゐる班長並に副班長の任命は八日左の如く発表した（以下略）⁽⁵²⁾

（以下略）の部分には東本町・西本町・初瀬町・生駒町・美吉町・鏡城・清津の通学区域ごとに班長・副班長の氏名が並んでいるが、班長・副班長は、いずれも当時の新5年生であった。生徒手

帳・『家庭の注意概略』といい「学友班」といい、羅南中学校が如何に風紀改善・校風作興に力を入れていたかが窺われる。ただし、「学友班」は、何時まで在ったか定かでない。筆者のインタビュー調査によれば、高橋虎彦校長時代（1937～39年度）まで存続したことは確かである。

ここで上掲表に戻って入学者・卒業者の総数を見ると、入学者は2,090名プラス・アルファ（1945年度入学者）、卒業者は977名プラス・アルファ（1945年3月同時卒業の第17・18回生）である。すなわち、入学者数と卒業者数の差が非常に大きいのが羅南中学校の特色だったのである。途中の転入・転出を無視して単純に各回生の入学者と卒業者を比較すると、最も極端だったのが1928年4月入学、1933年3月卒業の第5回生で、卒業者41名は入学者91名の半数以下（45.1%）に過ぎない。この計算が可能な第1回生から第16回生までを平均すると、卒業者は入学者の63.0%である。

このように卒業者の比率が低かったのは、軍人・軍属・官吏などいわゆる転勤族の子弟が多かったこと、寒冷・多湿な気候のため病氣（とくに結核）で中退する者もいたことなどが要因であるが、「軍都」羅南にあって軍国主義の影響を強く受け、在学中に軍関係の学校を受験して転・進学する生徒も少なくなかった。たとえば、第11回生（1934年入学）の「早稲田が一年の時、中田が二年の時、陸軍幼年学校に入校した。又、四年の時渡辺が陸士に」⁽⁵³⁾ 入学した。同じく第11回生の木金葆夫は、「海軍兵学校を病気で中退し、東京物理学校数学科卒の異色の先生であった」⁽⁵⁴⁾ 大重兼治の勧めで海兵に進んだ。中には、海軍兵学校に行ける力がありながら「敢えて即戦力になるべく予科練を志願し、祖国の為に散った」⁽⁵⁵⁾ 者もいた。第21回生（1944年入学）の陸軍幼年学校受験勉強の状況は次のとおりである。

軍国主義真っ只中の学生、当然の事乍ら、お国の為に命を捧げる事をモットーに、先ず陸幼の受験を志し、勉学に励みました。

その折りに、白方先生（化学）よりお誘いがあり、各家庭持ち回りで特訓を受けました。

メンバーは谷田君（聯隊長の子息）・谷口君（聯隊長の子息）・大崎君（北光館）・小畑君（小畑百貨店）・白方さん（白方先生の子息で一年上級）の諸君だったと記憶しております。

日程を組み放課後各自の家へお邪魔して、夜の更ける迄頑張りました。⁽⁵⁶⁾

軍関係の諸学校や予科練（海軍飛行予科練習生）に進んだ者たちの中には、戦後、自衛隊に入り幹部にまで昇任した者も少なくない。

ついでながら、旧制高校進学者の進学先で最も人気があったのは、三高・京大であった。それは、清津～敦賀間の船便の故に京都が身近に感じられたからである。京都帝国大学在学中の1941年11月、連絡船気比丸とともに日本海に没した哲学青年弘津正二も、羅南中学校の卒業生（第8回、1936年卒）であった。

本節の最後に、羅南中学校の朝鮮人生徒についてまとめておこう。羅南中学校韓国同窓会の会長を務めた全斗烈（第9回生）によれば、羅南中学校の朝鮮人生徒数は次のとおりである。

羅中には内鮮一体政策により、韓国人生徒も一部入学が許され、開校初期には一学年二・三人入学したのが、後年には十人位入学し、終戦まで韓国人卒業生総数は約九十人になっています。⁽⁵⁷⁾

総督府の『朝鮮諸学校一覧』によってこれを少々補うと、羅南中学校の朝鮮人入学者が初めて10名を数えたのは1937年であった。しかし、37年には内地人入学者が104名いたので、全入学者に占める朝鮮人の比率は8.8%であった。「内鮮一体」政策が顕著になった1938年、朝鮮人入学者が15名に増える一方で内地人入学者は93名に減り、朝鮮人入学者の比率も2桁に乗った(13.9%)。朝鮮人入学者のピークは1940年で、全113名中21名、その比率18.6%であった。

その1940年には創氏改名が施行された。多くの朝鮮人生徒は日本式に改名したが、「なかには抵抗して改名しなかった者もいた」⁽⁵⁸⁾し、「担任の先生の朝礼の時、出席呼名に対しわざと答えるのを控え、聞えないふりをした」⁽⁵⁹⁾者もいた。彼らのほとんどは、いわゆる両班(ヤンバン)の子弟であり、親日派と目されていたが、子ども心にも創氏改名は屈辱だったのである。

おわりに

「軍都」羅南に在った羅南中学校は、朝鮮北辺における軍国主義中等教育のメッカであり、現に多くの軍国少年が輩出した。しかし、「武」のみならず「文」においても「咸鏡北道の最高学府」というのが羅南中学校関係者に共通の認識であった。1940年4月に羅津中学校、同年5月に清津中学校、1941年4月に城津中学校(いずれも内鮮共学)が開設されても、咸鏡北道全域、さらには遠く豆満江を越えて満州からも生徒を集める羅南中学校の吸引力が衰えなかったことも、それを裏付けている。

したがって、同窓会の紐帯も強力であった。その羅南中学校同窓会が、引揚げ後日本で再興されるにあたり促進剤として作用したのが「全国清津会」の存在であった。「全国清津会」は、かつての羅南・清津(1940年清津に統合)の関係者・関係団体を網羅した組織で、1963年に発足、翌64年、社団法人として認可された。

羅南中学校同窓会は、「全国清津会」とも連携しつつ、活発な活動を展開してきたが、会員の高齢化には抗し難く、ついに2000年10月、記念誌『百寿』の刊行を掉尾として全国組織を解散した。

羅南中学校の校舎に関しては、「機械工業専門学校になっている」⁽⁶⁰⁾とか「北朝鮮の軍の施設として使用されている」⁽⁶¹⁾という伝聞情報があるが、直接確認した同窓生はいない。ちなみに、通学路にあった「羅中橋はそのままの名前で残っている」⁽⁶²⁾という。

母校跡への接近すらままならない情勢の中、老齢化した羅南中学校同窓生の「望郷」の想いは強いが、一方、「北朝鮮の完全な民主化こそ私達の夢です。それまでは母校を訪ねる気もしない」⁽⁶³⁾という人もある。

註

- (1) 『清津』1997年夏号 全国清津会 p.49
- (2) 同上 1996年春号 p.10
- (3) 『羅南公立中学校同窓会会誌 百寿』羅南公立中学校同窓会 2000年 p.9
- (4) 同上 p.17
- (5) 『清津』1996年春号 p.11
- (6) 同上 1996年夏号 p.30
- (7) 『京城日報』1928年7月29日付
- (8) 『清津』1996年春号 p.11
- (9) 西村緑也編『朝鮮教育大観』朝鮮教育大観社 1932年 咸鏡北道 p.4
- (10) 『京城日報』1928年11月15日付
- (11) 『百寿』p.24
- (12)・(13) 『清津』1996年夏号 p.34
- (14) 西脇良朋編『朝鮮中等学校野球史』私家本 2000年 p.113
- (15) 『清津』1997年新春特大号 p.47
- (16) 蔵重伸顯『中華人民共和国と私』私家本 1993年 p.64
- (17) 『清津』1997年新春特大号 p.48
- (18) 『百寿』p.67
- (19) 同上 p.41
- (20) 同上 p.81
- (21) 清津公立高等女学校同窓会誌『すゞらん』第27号 1984年 p.3
- (22) 『百寿』p.106
- (23) 『冠帽峰の残り雪——羅南中学校19期思い出の記』羅中19期会 1995年 p.37
- (24) 『百寿』pp.107-108, 附録p.1
- (25) 阿部薫編『朝鮮功労者銘鑑』民衆時論社 1935年 p.696
- (26) 『清津』1996年春号 p.11
- (27) (25)に同じ
- (28) 『朝鮮功労者銘鑑』p.781
- (29) 『百寿』p.43
- (30) 同上 p.44
- (31) 同上 p.84
- (32) 同上 p.101
- (33) 2007年8月現在, 西東3兄弟のうち3男志生(ゆきお)氏のみが健在である。西東校長の略歴は志生氏の証言による。

- (34) 『冠帽峰の残り雪』 p.207
- (35) 『百寿』 p.43
- (36) 『清津』 2005年号 p.56
- (37) 『朝鮮教育大観』 咸鏡北道 p.1
- (38) 『百寿』 p.79
- (39) 『京城日報』 1928年9月18日付
- (40) 『清津』 1996年夏号 p.32
- (41) 同上 2005年号 p.56
- (42) 『冠帽峰の残り雪』 p.65
- (43) 同上 pp.154-159
- (44) 『百寿』 p.96
- (45) 同上 p.135
- (46) 『京城日報』 1929年3月19日付
- (47) 『百寿』 p.78
- (48) 同上 p.92
- (49) 『中華人民共和国と私』 p.63
- (50) 『百寿』 p.84
- (51) 同上 p.81
- (52) 『京城日報』 1929年4月12日付
- (53) 『百寿』 p.51
- (54) 同上 p.49
- (55) 同上 p.91
- (56) 同上 pp.133-134
- (57) 同上 p.10
- (58) 『中華人民共和国と私』 p.64
- (59) 『百寿』 p.64
- (60) 『清津』 1997年新春特大号 p.48
- (61) 『百寿』 p.78
- (62) 『清津』 1997年新春特大号 p.49
- (63) 『羅中同窓会平成4年度大阪大会資料』 1992年 p.8

**Nanam Middle School:
A Case Study of a *Naichijin* School in Colonial Korea**

Tsugio INABA

Nanam (J. Ranan), a city in Hamgyŏng Pukto Province, started to develop into a military city at the end of the Russo-Japanese War (September 1905), when the military garrison of the Japanese Army for the defense of the northern Korean peninsula was constructed there. In as early as March 1907, the Japanese residents' association there established Nanam Elementary School.

Nanam Middle School was founded in May 1924 as the tenth middle school in Korea for *Naichijin*, or Japanese residing in colonial territories, following those in Keijō (K. Kyōngsŏng; present Seoul), Fuzan (K. Pusan), Heijō (K. Pyōngyang), Ryūzan (K. Yongsan), Taiden (K. Taejŏn), Taikyu (K. Taegu), Genzan (K. Wŏnsan), Gunzan (K. Kunsan) and Kōshū (K. Kwangju). This study describes the process of how Nanam Middle School developed into the best middle school in Hamgyŏng Pukto Province, and explores its unique school culture which derived from its location in a military city.

Nanam Middle School was the “Mecca” for militaristic education in northern Korea, producing many “home front youths.” On the other hand, the school was considered by its faculty as “the best school in Hamgyŏng Pukto Province” in both military arts and academics. This perception was substantiated by the fact that the school continued to attract students from not only throughout Hamgyŏng Pukto Province but also from as far away as Manchuria despite the successive establishment of new schools nearby.